

実践報告

日本人学生は「不自然な会話」をどう修正するか －会話文リライトに見られる特徴に関する分析－

橋本慎吾
岐阜大学留学生センター

要旨

日本語教育の教材で提示される会話には不自然なものがあるという議論がある。日本語母語話者がどのような点を不自然と感じるのかを考察するために、教科書会話を日本人学生がリライトする課題で書かれた会話文を分析した。その結果、基の会話文と比較した場合、リライト会話の展開の仕方、会話文1行目・2行目・最後の会話の内容などに特徴が見られた。また、2011年に行なったアンケートから、日本人学生が考える「自然な会話」のポイントが明らかになった。

キーワード

自然な会話、教科書会話、会話文リライト、日本人学生、評価

Report on Teaching

What is the Point of Written “Natural Conversation” ? - an Analysis of Rewrote Conversation by Native Japanese Students -

Shingo Hashimoto
Gifu University, International Student Center

ABSTRACT

When writing conversation sentences, what kind of point does the Japanese native speaker consider to be a point of "a natural conversation"? To discuss this point, "Natural conversation" in which the Japanese student rewrote textbook conversation was analyzed.

As a result, some feature was appeared from then difference between the turn of the conversation Japanese student wrote and that of conversation of textbook. Moreover, some point of "a natural conversation" which Japanese student considers were appeared from the questionnaire in 2011.

KEYWORDS

natural conversation, conversation of textbook, rewrote conversation, native Japanese students , evaluation

1. はじめに

日本語教育の教材で提示される会話には不自然なものがあるという議論がある。教授する文法事項に寄り過ぎていることが原因で不自然な会話が作られていることはザトラウスキー(1987)の「教科書によくあるような不自然でいかにも作られた会話」(p86)のように以前から指摘されている。

日本語に限らず、語学の教科書に載っている会話文は、実際の会話に比べ不自然なものが多い。それはその会話文が自然な会話を意図して作成されたものではなく、学習した文法や語彙を使ったやり取りを示すために作成されているからである。その不自然さは文法学習などの流れの中でその会話文を読んだだけでは気づきにくい、話している場所や話者同士の関係などを考えてロールプレイのように読んでみると、実際の会話との差異に気づき、不自然さを感じる。

どの点に不自然さを感じるかはさまざまなポイントがあると思われる。そこで本稿では、一般の日本語話者が教科書会話のどのような点に不自然さを感じるのかという問題を考える手がかりとして、筆者が勤務校において2008年から行なっている「会話文リライト」という活動において、日本人学生が書いたリライト会話文を分析し、日本人学生が考える「自然な日本語」について考察を試みたい。

2. 会話リライト課題

筆者は2008年から、勤務校において「日本語口頭表現」という授業を担当している。この授業は日本人学生と外国人留学生の合同授業で、演劇的アプローチを取り入れた様々な活動を通し、日本人学生には自分たちが使っている日本語を意識しながら留学生とのコミュニケーションを体験する機会を、留学生には日本人の生の言葉(フォリナー・トークに類するコントロールは多少入っているが)に触れる機会を提供している。毎年度20名弱の日本人学生と、15名程度の留学生が参加している。

この授業では、日本人学生と留学生が協力して「誘い・断り」などの会話や複数によるミニドラマを作成して演じる活動を行なう。この活動の目標の一つは、日本人学生が自分自身の日本語を意識的に捉え、できる限り自然な日本語会話を作ることである。しかし、「自然な日本語会話」を簡単に「作成」できるわけがなく、またこの授業で教師が「自然」な会話の特徴を具体的に示すわけではない。実際に会話を作り、それを身体を動かしながら演じてみることにより、会話の自然さについて何らかの意識を持ってもらうことがこの授業が目指すところである。

第1回目の授業では日本人学生のみを集めて授業の概要を説明し、「自然な日本語会話」について考えてもらう最初の取り組みとして、「会話文リライト」を最初の宿題として課す。「会話文リライト」とは、日本語教育の教科書にある会話を提示し、この会話を実際の会話として書き直すことである。具体的にはプリントを配布して次の指示を出し、1週間後にリライトした会話を提出することを求める。

A：伊藤さん、一緒に会社の近くのスポーツクラブに入りませんか。スポーツは健康にいいですし。

B：でもねえ、僕は通勤時間が長いからねえ。

A：毎日する必要はないんですよ。週に2日ぐらいどうですか⁽¹⁾。

この会話が本当の会話だったらどんな会話になるか。想像して書きなさい。

(単に上の会話を書き直すのではなく、「AさんがBさん(伊藤さん)をスポーツクラブに誘う」場面がもし本当にあったら、どんなやり取りをするかを書いてほしい。

もしあなたがAさんだったら、と考えると書きやすいかもしれない)

[考えるべきこと]

(1) AさんとBさんはどんな関係か

(2) 二人は今どこで話しているか

(3) 二人はどんなふうに話しているか

(4) なぜAさんは「伊藤さん、」と呼びかけたのか

(5) なぜAさんは伊藤さんを誘ったのか

この「会話」は、AがB(伊藤さん)をスポーツクラブに誘い、Bが躊躇し、Aが再度誘う、というやり取りである。誘いの表現が使われており、言葉遣いからAとBの関係(会社の同僚でBは先輩)も分かるので、ただ会話文を読んだだけでは特に不自然さを感じないかもしれない。しかし、この会話を実際の会話として考えると不自然である。

この会話文の不自然さの要因について、橋本(2006)で次のように指摘した。「例えば会社の同僚をスポーツクラブに誘う場合、廊下でばったり会って突然上記のように「入りませんか」と言うことはない。これは、デスクが隣同士の同僚に話しかける場合であっても、一緒に食事している相手に対してであっても同様である。もし実際にこのような発話を会話の最初にしたら、相手は驚いてしまうことであろう」(p38)。また、一口に「誘い」と言っても、学食で昼ごはんを食べようと誘う場合と、スポーツクラブ入会のように時間と費用がかかる行為に誘う場合とでは誘い方も異なる。川口他(2002)が指摘するように、誘いには「環境整備」⁽²⁾が必要であるが、その環境整備がこの会話では全く行なわれていない。また誘われたほうの反応も直接的過ぎて不自然である。通常、「通勤時間が長い」という断りの理由を持ち出す前に、自分を誘った理由や、スポーツクラブに関する情報などを聞くであろう。

筆者が行なっている授業では、会話リライト課題を与える際、以上のような「不自然さの要因」については学生に指摘せず、実際に会話文を「読む」ことによって学生に不自然さを身体で感じてもらうことを考えている。まず任意の学生2名にこの会話を座ったまま読んでもらい、次に同じ学生に、話している場所を考えてもらい、椅子などを使って会話の場面を作った上で再び会話を読んでもらう。またこの会話のAとBは男性であると考えられるが、女性に読んでもらう。このように実際に動きを入れながら会話を読んでもらった上で、実際にスポーツクラブに誘う場合と違うところはないだろうかと問いかけ、会話リライトを求めている。ちなみにこれまでの授業で、問いかけた際に、不自然さの要因が学

生から具体的に指摘されたことはないが、提出された会話文は、それをこちらが要求したとはいえ、基の会話文が書き換えられており、基の会話文に何らかの不自然さを感じていると考えることができる。

筆者はこの課題を 2008 年から 2011 年度にかけて行なっており、現在までに 72 のリライト会話が提出された。本稿ではこの 72 のリライト会話を分析し、日本人学生がどのように会話を修正したかについて考察する。

3. 日本人学生が書いたリライト会話の特徴会話の特徴

3.1 リライト会話の分量

基の会話文は、3つのやりとりからできている。以降の分析では、基文①②③とする。

- ①A：伊藤さん、一緒に会社の近くのスポーツクラブに入りませんか。スポーツは健康にいいですし。
- ②B：でもねえ、僕は通勤時間が長いからねえ。
- ③A：毎日する必要はないんですよ。週に2日ぐらいどうですか。

この会話文は、「①誘い→②躊躇→③再度誘い」という流れで会話が展開しており、B（伊藤さん）が誘いを受けたかどうかは示されていない。

まずリライト会話の分量について表1に示す。

表1 リライト会話の分量

やり取り数	該当数	
3	2	基会話と同じ
4	4	
5	6	
6	7	
7	10	
8	27	
9	2	
10	2	
11	2	
12	3	
13	1	
14	3	
15	0	
16	0	
17	1	
18	1	

リライト会話のやり取り数が基の会話のやり取り数と同じなのは2つだけで、ほぼ全てのリライト会話は基の会話より分量が多くなっている。分量が同じ会話では、以下のよう
に言葉が変えられている（変えられている部分を下線で示す）。

A：伊藤さん、いきなりですが、一緒に会社の近くにあるスポーツクラブに行ってみませ

んか？ たまには体を動かすのも良いですよ。

B：でもなあ、僕、通勤に結構時間かかるからなあ。

A：毎日じゃなくてもいいですよ。僕も週2日くらいで行ってますから。

このリライト会話を書いた学生は、基文①の切り出しが唐突であると感じ、「いきなりですが」という言葉を書き加えたのであろう。また、自身の考える自然な言葉遣いに書き換えられていたり、「週2日」という情報を、相手への問いかけではなく自分自身がどのくらい通っているかで示したりするといった書き換えが行われている。

3.2 リライト会話における基文の出現位置

次に、リライト会話がどのように書き換えられているかを分析する。リライト会話は基の会話とまったく異なったものではなく、基の会話の文や言葉が必ず残っている。そこで基文①②③が、リライト会話のどの行に現れているかを分析する。例えば基文①が1行目、②が2行目、③が3行目に現れている場合、これを「1→2→3」と表す。また、誘いを切り出す前に何らかの別の発話を行なっているものもあるが、その場合、基文①が1行目より後に登場することになる（例えば「3→4→5」）。

また会話の総行数については、例えば「1→2→3」で総行数が3ということは、基の会話文と全く同じ分量であるということであり、総行数が3を越えるものは、基の会話文の続きが書き足されていることになる。

また、基文の内容が2つのやりとりに分かれていることもある。例えば次のようなやりとりである。

3 A：毎日する必要はないんですよ。

4 B：うーん。

5 A：週に2日くらいどうですか。

この会話の場合、基文③が3行目と5行目に分かれて現れているので、これを「3+5」と表す。ちなみにこの会話は全体としては「1→2→3+5」と表される。

また、同じ話を繰り返す場合も見られる。

1 A：伊藤さん、一緒に会社の近くのスポーツクラブに入りませんか？

2 B：良いですね、でも、時間がないんですよ。いきなりどうしたんですか？

3 A：最近少し体重が増えてしまってね、気にしていたんですよ。

4 B：確かにAさん、最近少し太りましたね。でも、私も最近体重が気になるんですよ。

5 A：そうなんですか、じゃあ一緒にスポーツクラブに入りましょうよ。

この場合、繰り返しのあるものを+でまとめる。例えば上の会話は「1+5→2」と表す。

以上の方法により、リライト会話における基文①～③の出現位置をまとめたものが表2である。なお表2は、後述する「会話の展開」で分類がなされている。以下、文中のカッコ内の数字は該当するリライト会話数を示す。

表2 基文が登場する行と、会話の全行数

		総行数	該当数	
最初から誘い (総数 34)	1→2→3	3	3	基会話と同じ
		4	3	
		5	1	
		6	3	
		7	2	
		8	12	
		12	1	
		13	1	
	14	1		
	1→2→3+5	5	1	
	1→2→5	8	1	
	1→4→5	5	1	
		6	1	
7		1		
8		2		
1→2+4 (3なし)	5	1		
呼びかけ (総数 6)	1&3→4→5	17	1	
	1+3→4→5+7	8	1	
	1+5→2 (3なし)	7	1	
	1+5→8→11	18	1	
	1+6→7→8	12	1	
前置き (総数 31)	3→4→5	5	2	
		6	3	
		7	3	
		8	5	
		12	1	
	3→4→5+7	8	1	
	3→4→7+9	9	1	
	3→6→7	8	1	
	3→4+6→7	7	1	
	3+5→6→7	8	1	
	3+5→6→7	7	1	
	3+7→8→9	10	1	
	5→6→7	8	3	
		7	1	
	5→6→9	14	1	
7→8→9	9	2		
	10	1		
	14	1		
7 (2・3なし)	7	1		
例外 (総数 1)	2→3→4	4	1	B から会話が始まる

表2を見ると、最も多いのは「1→2→3」(27)、次いで「3→4→5」(14)、「1→4→5」(5)、「5→6→7」(4)、「7→8→9」(4)となっており、「1→4→5」以外は基文①②③が連続して現れている会話となっている。リライト会話では、基文と基文の間に別の会話を挟むことがあまり行なわれていないことがわかる。

最も多い「1→2→3」の項目を見ると、総行数が3を越えるものがある(25)。これは基文①②③の続きの会話がかかれてことになるが、基の会話の不自然さを、Bが誘いを受けたかどうか書かれていないことにあると考え、その続きを書いてBの意向を示したと考えられる。あるいは、基の会話の続きに、誘いを受ける(あるいは断る)までの自然なやり取りを表現した学生が多かったとも考えられる。

3.3 会話の展開

次に会話の展開について分析する。基文①が1行目に現れる場合、「伊藤さん、一緒に会社の近くのスポーツクラブに入りませんか」と誘いの言葉を使う場合と、「伊藤さん」と「一緒に会社の近くのスポーツクラブに入りませんか」が切り離されている（間に相手の言葉が入る）場合が見られた。そこで基文の現れ方から見た会話の展開の仕方でも分類を行なった。「最初から誘い」は、会話の冒頭、第1行目から誘いが始まっているもので、基文①と同じである。「呼びかけ」は、会話の冒頭が相手（伊藤さん）に呼びかけを行なっており、相手の言葉のあと、誘いを行なっているものである。「前置き」は、基文①の前に別の内容の発話が見られるもの、「例外」は、今回のリライト会話はそのほとんどがAから始まっているが、1例だけB（伊藤さん）から始まっているものがあり、それを例外とした。

表3は、会話の展開の4つの分類をまとめたものである。以下、文中のカッコ内の数字は該当するリライト会話数を示す。

表3 リライト会話の展開

	該当数
最初から誘い	34
呼びかけ	6
前置き	31
例外	1

表3を見ると、最初から誘っている会話(34)と、前置きをしてから誘っている会話(31)が多数を占めていることがわかる。「例外」は話者Bから会話が始まっているということであるが、あくまで今回のリライト会話における例外に過ぎず、実際の会話でも常に誘う人から会話を始めるわけではないので、この学生なりの自然さの表現であると考えられる。

[例外（会話Bから会話が始まっている）のリライト会話]

- 1 B：最近食べてばっかでどんどん太っているな。
- 2 A：伊藤さん、それなら近くのスポーツジムに入りませんか。僕も最近運動不足なので始めたんですよ。スポーツは健康にいいのでオススメですよ。

3.4 会話の始まりの分析

次に、リライト会話の1行目、すなわち会話の始まりの部分について分析する。表4は、会話のいちばん最初の言葉の割合を示している。

表 4 第 1 行目の最初の語

		該当数
伊藤さんへの呼びかけ	伊藤さん	43
	あ、伊藤さん	8
	すみません、伊藤さん	2
	ねえ、伊藤さん	2
	あの、伊藤さん	1
	あれ、伊藤さん	1
	そうだ伊藤さん	1
	なあ、伊藤	1
あっ	1	
あの	1	
なあ	2	
ねえ	3	
その他（質問など）	5	
その他（B から話す）	1	

表 4 を見ると、半数以上の会話が、基の会話文と同じように「伊藤さん」からはじまっていることが分かる (43)。しかし、同じ伊藤さんへの呼びかけでも、「あ、伊藤さん」(8) や「すみません、伊藤さん」(2) など、「伊藤さん」の前に何らかの言葉を足しているものも多いことが分かる (総数 16)。また、「ねえ」などの呼びかけの言葉のみで相手の名前を言っていないものもある (総数 7)。

次に、最初の発話で伝えている内容について表 5 に示す。

表 5 第 1 行目の内容

	該当数	
スポーツクラブに誘う	33	基会話と同じ
健康について話す	14	
あいさつ	9	
質問	7	
呼びかけ	4	
スポーツクラブについて話す	3	
その他	2	

この表 5 を見ると、基の会話と同じように最初の発話でスポーツクラブに誘っている会話が分かる (33)。この結果を表 4 と合わせて考えると、会話の切り出しの部分においては、基の会話と同じものが半数近くあるということになる。一方、最初の発話では誘いを切り出さず、あいさつや別の話題で会話を切り出している会話も多い (総数 37)。また、一旦「伊藤さん」と呼びかけた後、相手の反応を待って誘いを切り出す会話も見られる (呼びかけ 4)。別の話題では、スポーツクラブということで健康に関する話題から入

る会話が多く見られた (14)。唐突にスポーツクラブについて話すのではなく、関係する話題をまず振ってからスポーツクラブの話を持ち出すという流れを形成しており、このような会話の流れを自然だと思っている学生が多いということである。

総じて、基の会話の切り出しを不自然だと思っていない学生と、不自然だと感じて別の言葉で切り出しを図っている学生に分かれる結果となった。

3.5 誘われる側の反応

次に2つ目のやり取り、つまり最初の切り出しに対する相手の反応について分析する(基の会話では、「通勤時間が長い」という断りの理由を示している)。次の表6は、第2行目の会話の内容について示している。

表6 第2行目の内容

	該当数	
躊躇 (通勤時間が長いから)	22	基会話と同じ
Aの言葉に対する応答	19	
問い返し	16	
あいさつ	7	
躊躇 (「うーん」など)	5	
断り	2	
Aが誘う	1	

この表を見ると、基の会話と同じように「通勤時間が長い」ために躊躇していることを示す発話も多い(22)が、最初の切り出しに対する応答(健康状態に対する回答、自分の予定を話すなど)や、「どうして?」「なに?」などの問い返しが多いことが分かる(総数25)。最初の切り出しが誘いではない場合はその切り出しに対する反応であり、誘いの場合にはすぐに躊躇を表すのではなく、誘った理由や相手の意図を知るための反応を示しているということである。

3.6 会話の最終行の分析

最後に、リライト会話がどのように終わっているかについて分析する。基の会話では、「週に2日ぐらいどうですか」と再度誘っているところで終わっており、最終的に誘いを受けたのか断ったのかが示されていない。

まずリライト会話が誰の発話で終わっているかについて表7に示す。基の会話はAの発話で終わっている。これを見ると、Bの発話で終了している発話が半数以上を示していることがわかる。

表7 最後の発話者

最後の発話者	該当数
Aで終了	26
Bで終了	46

次に、リライト会話の最終行の内容を表 8 に示す。

表 8 最終行の内容

内容		該当数	
A で終了	週 2 日ぐらいどうですか	11	基会話と同じ
	あいさつ	4	
	再度誘う	3	
	断られる	3	
	その他	4	
	誘う※	1	
B で終了	誘いを受ける	17	
	「考えておく」という	11	
	了解	10	
	感謝する	3	
	じゃあまた	2	
	その他	3	

※は、基文①のみが書かれていて、②③がカットされている会話であった。

この表を見ると、A で終了している会話のうち、基の会話文と同じように B が誘いを受けたかどうか分からない会話も多い (11) が、「とりあえず一度一緒に見学に行きませんか」と別の言葉で再度誘っているものや、断られたことを受け入れているものなど、基の会話とは異なる発話も見られる。

また B で終了している会話では、誘いを受けることを示す発話 (17) とともに、「考えておく」と回答を保留する発話 (11) が多く見られた。表中の「了解」というのは、その直前の発話に対して「OK」「ああ」「うん」などと応答していることを示しているが、いずれもその前のやり取りで誘いを受けている。

4. 書いた学生が考えるリライト会話の特徴

4.1 学生が考える自然な会話の特徴

ここまで、リライト会話の展開、1行目、2行目、最後の会話の内容について見てきた。実際に書かれた会話に見られる傾向を見てきたことになるが、この会話を書いた日本人学生がどのような点に会話の自然さを感じているのかはここまでの分析では不明である。

そこで、2011年度の授業では、学生が書いた全会話（22会話）をタイプして配布し、基の会話とリライト会話の違いを複数挙げるという課題を出した。表9は、日本人学生が挙げた相違点の中から多くの学生が挙げたものを示している。

表9 日本人学生が示した基の会話とリライト会話の違い

1	「うーん」「えー」等が入る	8
2	日常にあるような言葉が使われている	6
3	二人の関係が分かる	6
4	Bの対応が自然	5
5	会話の流れが自然	5
6	前置きがある	5
7	間が置かれている	5
8	基の会話より温かい感じがする	4
9	会話が長くなっている	4
10	Aの対応が自然	3
11	方言が入っている	3

これを見ると、間を表す「…」や「うーん」といった不要な言葉など、言葉遣いに関する点（項目1、2、7、11）と、会話の状況や流れに関する点（項目3、5、6、10）が多く挙げられていることが分かる。「日常にあるような言葉」というのは、学生のコメントによると「最近」や「お試し」など、基の会話にはないがこの話題であれば出てくる可能性のある言葉という意味である。日本人学生は自身の日常と比較し、普段口にする、耳にする言葉を会話に盛り込んだということであり、そのような会話を自然な会話として評価しているということである。このような点を考慮するだけでも、書いた会話が「自然な会話」となり得るということである。

また、「会話が長くなっている」という項目があるが、自然な会話の流れを形成するために会話が長くなるということであろうか。間や不要な言葉を加えるだけでも会話は長くなるのである。また1度の発話で呼びかけから発話まで行ってしまうのではなく、通常の会話は相手の反応を受けて少しずつ進んでいくので、会話は長くなるわけである。必ずしも長ければ自然な会話になるというわけではないが、会話を書くという場合には、基の会話のように文型を中心として多くをそぎ落とした会話文は自然な会話とするにはあまりにも短いということであろう。

4.2 最も評価の高かったリライト会話

また別の課題として、2011年度の全会話の中で自然な会話だと思う会話を2つ選び、その理由を記すという課題を出した。学生の評価が最も高かったのは次の会話であった。

A：あ！ 伊藤さん、おはようございます。今日電車なんですか。めずらしいですね。
 B：おはよう。いやー最近ちょっと運動不足でね…。車から電車に変えたんだ。
 A：確かに。毎日デスクワークで僕も最近腹回りがちょっと気になります。
 B：ははは！ まだ君は若いじゃないか。俺なんか毎日かみさんにメタボメタボ言われてるよ…。
 A：女性は厳しいですね…。あ、そういえば会社の近くのスポーツクラブが新規会員の募集のキャンペーンをやっていましたよ。
 B：スポーツクラブかー。ああいうの俺続かないんだよなあ。あと時間もないし。
 A：意外と大丈夫ですよ。実は僕今月で3ヶ月目なんですけど、まだ続いています。
 B：そうなのか！ 大体週にどれくらい行ってるんだ？
 A：早帰りの水曜日と月曜と木曜に行ってますよ。1回2時間半くらいです。総務部の田中課長もいらっしゃいますよ。
 B：田中が？ あいつスポーツクラブ通ってんのかあ。確かに最近ちょっと痩せた気がする…
 A：よかったら僕の友人紹介で入会金がタダになるので、その気になったら行ってください。今キャンペーンで1回体験無料もあるので。
 B：おおありがとうございます。良い機会かもしれないな。ちょっと考えてみるよ。
 A：はい！ わかりました。それと今日の午後の会議もよろしくお願いします。
 B：ああ。じゃあまた後で！

この会話を自然であると評価した学生のコメントは以下の通りである。

会話の流れが自然	会話への入り方が自然。
	メタボなども、つながっていて自然な誘い方である。
	会話が自然に聞こえる。
	日常的な何気ない会話から、このスポーツクラブの話題になった感じが自然だった。
	基の文章と比べると、スポーツクラブまでの話題転換が日常の会話として自然である
	スポーツクラブに通うのを誘う理由が自然。
	車から電車通勤にかえたという日々の移り変わりが表現されているから。
	うまいこと流れていると思った。
	実際によくありそうだしスムーズ
	電車だと言う理由づけに運動不足をさらっと強調している。
	キャンペーンだとか自分も行ってるということで行こうかなという気にさせている
会話の状況が分かる	いつ誘ったのか、なぜ誘ったのかということが詳しく分かるから
	親しげな上司と部下の関係がよく分かる。
	場面がいちばん想像しやすかったから。

	知り合って時間のたった上司と部下の関係が感じられやすい
会話の終わり方が自然	最後に会議の話をしているところにリアリティを感じる。
	会議のことも忘れずに、別れのあいさつもいい。
	会話のしめに、「会議よろしくお願ひします」という感じになっていて、切れ目を作っているのが自然の会話のようであったから。
日常的な言葉が使われている	日本人の上司と部下の間に日常的にありそうな会話だとおもったから。
	「ははは！」や「〇〇が？」など私達も普段使う言葉がいくつか入っているから。
	家での「かみさんからメタボとよく言われる」ということが会話の中に日常を取り込んでいて、我々も話すときにそういう会話していると考えたから。
会話が長くなっている	一般的な会話は長い。
言葉が具体的	週2日くらいの具体的な点が表れている。
その場にはいない人が出てくる	「かみさん」とか「総務部の田中課長」とかも出てきて、本当っぽく聞こえる。

前項で示した自然な会話の評価ポイントである「会話の流れ」「会話の状況」「日常的な言葉」に対する評価がここでもなされている。また「会話の終わり方」「その場にはいない人が出てくる」という評価は、教科書会話では割愛されていることが多い要素のではないだろうか。

5. まとめ

本稿では、日本人学生によるリライト会話を分析し、日本人学生が考える「自然な会話」について考察した。今回の分析はあくまで書かれた会話についての特徴抽出であり、文字で読む分には自然と感じられても、実際に声に出して読んでみることによって、自然だと思われた会話が不自然である場合があり、逆に不自然だと思われた会話が自然であるということが生じる場合がある。その意味で、4.2に挙げた会話文が自然かどうかは、実際に読んでみると違った判断がなされる可能性もある。また、どんな人がその会話を読むか、どう読むか（発音のみならず、身体的状況も含め）によっても、会話の自然性に影響が出ることも考えられる。今後は、書いた会話を実際に発話して読むことによって会話の自然性について考えることのできる活動などを考えてみたい。

参考文献

- 川口義一(2005)「日本語教科書における「会話」とは何か ―ある「本文会話」批判―」、『早稲田日本語教育研究』6、1-13 ページ
- 川口義一、蒲谷宏、坂本恵(2002)「待遇表現としての「誘い」」、『早稲田日本語教育研究』1、21-30 ページ
- 小池真理(2000)「日本語母語話者が失礼と感じるのは学習者のどんな発話か ―「依頼」の場面における母語話者の発話と比較して―」、『北海道大学留学生センター紀要』第4号、58-80 ページ
- 高木美嘉(2004)「「会話」という待遇コミュニケーションの仕組み ―会話教育の基礎理論の考察―」、『待遇コミュニケーション研究』第1号、17-32 ページ
- 田辺和子(1985)『基礎日本語会話』の反省と初級会話教材のあり方」、『筑波大学留学生教育センター日本語論集』第1号、1-46 ページ
- 橋本慎吾(2006)「ロールプレイにおける会話の自然さ ―誘いにおける会話の始め方について―」、『岐阜大学留学生センター紀要』2006、37-44 ページ
- 平田オリザ(2004)『演劇入門』、講談社現代新書
- ザトラウスキー、ポリー (1986, 1987)「談話の分析と教授法(I) (II) (III) - 勧誘表現を中心に -」、『日本語学』、第5巻11号 pp. 27-41、第5巻12号 pp. 99-108、第6巻第1号 pp. 78-85

注

- 1 この会話文は、『新日本語の中級』スリーエーネットワーク、「解答・スクリプト」14 ページ、第5課「聞こう」スクリプトである。
- 2 川口他(2002)は「誘いのための環境整備」は次の4つが考えられ、それぞれに具体的表現例を挙げている(p26)
 - ①その「行動」を予定している日時に「相手」も時間が取れるかを尋ねる
(表現例：来週の土曜日の午後、お暇ですか。／何か予定ありますか。)
 - ②その「行動」を「相手」がそもそも好きか／興味・関心があるかをたずねる
(表現例：モダンジャズなんか お好きですか／聞いてみたいと思いますか)
 - ③その「行動」やその関連事項についての「相手」の経験をたずねる
(表現例：モダンジャズって聞いたことが／新しい市民ホール、行ったことがありますか。)
 - ④その「行動」を提案するに至った事情を説明する
(表現例：実は、ジャズのチケット、2枚あるんですけど。／友人が出演するんで。)